様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｋ１６７６７

研究課題名（和文）讃岐方言における発話行為体系と発話末表現の相関の解明のための予備的研究

研究課題名（英文）A Preliminary Study for Elucidating the Correlation between Speech Acts and Utterance-Final Expressions in the Sanuki Dialect

研究代表者
乙武　香里（Ototake, Kaori）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変異研究領域・プロジェクトPDフェロー

研究者番号：６０７０９８４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，香川県で話される方言（以下，「讃岐方言」と呼ぶ）の発話行為（発話によって為される行為）の体系を明らかにすることを最終目的とした上で，ナ行音終助詞「な」，「の」，「ね」と発話行為の対応を調べた。これまでに，讃岐方言の終助詞「な」，「の」は，地域と話者の性別により発話中の出現に違いがあることが指摘されているが，体系的な考察や生起環境の詳細な観察は行われてこなかった。本研究では，主に2地点（綾川町と高松市三谷町）の男女の母方言話者のデータを比較し，発話中に現れるナ行音終助詞の統語環境，待遇性の違い，音調等のパラ言語情報を調べ，発話行為の体系の中での位置づけを行った。

研究成果の概要（英文）：This study aims to elucidate the speech act continuum in the Sanuki dialect spoken in Kagawa Prefecture. The correspondence of the particles “na”, “no”, and “ne” to speech acts were examined. Although earlier studies showed that the distribution of “na” and “no” differs according to area and sex, there is no systematic study or detailed observation of the linguistic environment in which they occur. Comparing data of male and female native speakers from two areas, Ayagawa-cho in the middle part of the Prefecture and Mitani-cho in Takamatsu city, syntactic environment, degree of politeness, and paralanguage information such as intonation of the particles were investigated and mapped in the system of speech acts.

研究分野：語用論，日本語学，方言学

キーワード：香川県　讃岐方言　ナ行音終助詞　発話行為

１．研究開始当初の背景

(1)

「発話行為」とは，「発話によって遂行される行為」のことである。本研究は，人がことばを話すと同時に行う「命令」「確認」といった発話そのもの以外の行為を，ことばの考察の中心的な観点とする。

発話行為は普遍的ではなく，言語差・文化差があることが報告されている。言語差・文化差というのは，例えば，英語では疑問形式が遠回しな要求などの質問以外の発話行為に及ぶのに対し，ポーランド語では疑問形式が質問に限定されるといった違いである（Wierzbicka 2003)。

日本語の発話行為に関する研究には，Tsuchihashi（1983）がある。Tsuchihashi（1983）は，日本語の小説に現れる会話の文末表現を調べ，発話行為が平叙文～疑問文の間で連続的であることを明らかにした。その連続体は，情報提供を求めるもの，確認するもの，同意を求めるものなどから成るが，それぞれの発話行為に対応する各文末表現は一対一ではなく，文末表現ごとに対応の度合いが異なることを示した。

(2)

発話行為に関して，Givón（1990）は，伝統的な発話行為の分析が典型的な発話行為（prototype peaks）ばかりを研究していると指摘し，発話行為の連続体（speech-act continuum）に注目すべきだと提唱した。たとえば，疑問文の典型は，情報を引き出すという目的を遂行するもので，それに最も合致するのは，不足している項目に入る要素を確かめる（to confirm the identity of a missing item）疑問詞疑問文，命題の真実性を確かめる（to confirm the truth of a proposition）真偽疑問文である。これらの典型的な疑問文と平叙文の間には，次の例のような連続性が認められるが，典型的な疑問文の疑問詞疑問文や真偽疑問文に関する研究が盛んであるのに対し，疑問文～平叙文の連続性に関しては目が向けられていないと指摘している。

①
most prototypical declarative
a.　Joe is at home.
b.　Joe is at home, I think.
c.　Joe is at home, right?
d.　Joe is at home, isn’t he?
e.　Is Joe at home?
most prototypical interrogative
(Givón 1990: 818)

上記の「平叙文～疑問文」という語を，行為を表わす語に置き換えると「【断定】～【質問】」と言えるだろうが（以下，それぞれの発話行為は【　　】に入れて示す)，この英語の発話行為の連続体には，①c の“, right?”や①d の付加疑問文で示されるように，【確認】の行為が含まれる。讃岐方言のナ行音終助詞も頻繁に【確認】の発話に現れるほか，【質問】の発話にも出現する。

さらに，北野（1993）は，「ね」で終わる文が疑問文と平叙文の中間にあることに注目し，疑問文と平叙文が連続体であるのと同様に，例②や例③の「確認要求」と「内部確認行為」も連続体と捉えられるということ，「確認要求」と「内部確認行為」の違いは，聞き手に確認を求める力の大小だということを述べている。

②「確認要求」
彼は確か岡山の出身だったね。
（益岡・田窪 1989）

③「内部確認行為」
A: 理想の女性は？
B: やっぱり，しとやかで優しい女ですね。
（蓮沼 1988）

(3)

井上（2002）は方言終助詞の記述研究を発展させるために，各方言の終助詞の統語環境を調べ，方言間で比較することを提唱している。そして，例えば，富山県砺波方言の終助詞「ね」は後接する他の終助詞をもたないが（井上 2002)，山形市方言の終助詞「ね」は終助詞「は」が後接し得る（渋谷 1999）ことなどを比較した上で，終助詞の汎用性の程度，他の終助詞との共起可能性，文末（述語）への近さから導かれる文法論的な意味について考察している。しかし，この考察では，大まかな仮説を立てるに留め，文法論的な意味については不明な点が多いと述べている。

(4)

発話行為の連続性と言語間の違い，終助詞に対応する発話行為の連続性，井上（2002）が挙げた方言間における終助詞の文法的性質の違いから，次のように予測する。

ｉ）それぞれの方言に発話行為の連続的な体系がある。

ⅱ）発話行為の連続体の内部構成（並び方・隣接関係・重なり）は方言間で異なり，これらの違いが終助詞の汎用性，他の終助詞との共起可能性，発話内での位置の相違として現れる。

２．研究の目的

上記の予測をもとに，讃岐方言の発話行為の連続体とその内部構成を客観的に記述することを目的とする。

発話末表現の中でもナ行音終助詞に焦点をあて，次の点を調べることで内部構成を明らかにする。

ⅰ）讃岐方言のナ行音終助詞「な」,「の」,「ね」の出現頻度と対話相手との相関

ⅱ）ナ行音終助詞の現れる統語環境と発話行為との関係

ⅲ）会話の状況と発話行為との関係

３．研究の方法

発話状況をふまえて発話と発話行為の関係を考察することを考慮するため，本研究では，(1)調査者が予め台詞や場面設定を指定しない雑談等の自然会話を収録し，そこに現れた発話を分析・考察することを第一の方法とする。次に，(2) 質問紙による聞き取り調査を行い，自然会話データを補う。

(1)

自然会話の収録は，先行研究でも述べられている終助詞「な」,「の」の出現状況を考慮し,「な」が主流の綾歌郡綾川町滝宮と「の」が主流の高松市三谷町で行う。基本的に，当該地域の生え抜きの方言話者に協力をお願いし，1 回 30 分～3 時間程度の収録を行う。また，データは，本研究の開始以前に同地域の話者の会話を収録したものも含む。収録データには，発話の書き起こしやイントネーションやポーズなどのパラ言語情報の記述によるアノテーションを行う。また，自然会話のデータとして,『全国方言談話データベース：日本のふるさとことば集成 第 16 巻 香川・徳島』(国立国語研究所）に収められている観音寺市（「な」が多く聞かれる地域）のデータも活用する。

図１　3 地点の位置

(2)

特定の統語環境（命令文が現れない等）やネガティブエビデンスの欠如などの，自然会話のデータだけでは不足する部分を補うために，インフォーマント（自然会話の収録の協力者）への質問紙による対面式聞き取り調査や容認度調査を行う。聞き取り調査は，状況説明を付した共通語の文を讃岐方言に訳してもらう形と，場面だけを提示（言語による場面提示）して文を作ってもらう形とで行う。また，調査者が作成した文が，インフォーマントの話す讃岐方言として自然かどうかを問う容認度調査も行う。観音寺市においても，上述の文献に収められているデータの収録時と現在とを比較するために聞き取り調査を行う。

４．研究成果

本研究で得られた主な成果を下に示す。研究期間内で主に比較対象としたのは綾川町と三谷町のデータで，その比較分析の結果を述べる。

(1)

「な」と「の」の発話行為との関わりで，まず大きく異なるのは,「な」が【質問】の行為にも及ぶのに対し,「の」は【質問】には表れないということである。女性の【質問】の発話では，綾川町でも三谷町でも「な」が現れる。

男性の場合,【質問】の際に発話末に現れるのは,「な」や「か」,「や」である。「な」は，目上の人や，あまり親しくない人に対する丁寧な発話で出現する。家族や友人とのくだけた会話では,「か」や「や」が現れる。

(2)

男性の【質問】の発話末には,「な」,「か」,「や」が現れる。「な」と「か」,「や」の違いは，(1)で述べたように，待遇性の度合いから生じる。「か」と「や」の違いは，真偽疑問か疑問詞疑問かの別で，真偽疑問では「か」，疑問詞疑問では「や」が発話末に現れる。

また,「か」と「や」には先行するノダの有無に違いがある。共通語のノダに相当する「の」は，讃岐方言では「ん」の形で現れることが多いが，否定の後など,「ん」に続くときは「の」の形で現れる。そして，疑問詞疑問の「や」には，このノダ，つまり「ん」（「の」）が必ず現れるが，真偽疑問の「か」にはノダが現れることも現れないこともある。

【質問】の「か」には例外があり,「話者自身が発話時に行なうこと」と「発話によって描かれる事態」が一致するとき，疑問詞を含む発話に「か」が現れる。例えば，自然会話から得られた発話データ④では，発話することによって話者自身が置き忘れた電話番号のメモの【探索】行為が開始される。このとき，疑問詞と「か」は共起している。

④

どこんある**か**？電話番号書いとんじゃ。

この例外の「か」の発話は，Austin (1962) が指摘した英語の遂行動詞文に類似している。そして，このような発話では，疑問詞疑

問の「や」と異なりノダが現れない。

(3)
「な」と「か」の違いは待遇性の度合いで捉えることができる。上記(1)，(2)で述べたように，男性の【質問】の発話では待遇性が高い場合「な」が現れる。また，女性の【質問】でも，年下の家族に対する発話では，「か」が現れることもある。
【把握】の発話は【質問】の発話と同じセグメント形式（「な」，φ，「か」）が下降調を伴って現れる。女性の【質問】の発話末では「な」が現れ「か」は現れないが，【把握】の発話では下降調の「か」が現れる。【把握】という行為は聞き手に向けられるというよりも，話し手自身で完結する行為であるため，ぞんざいさの意識が弱まっている発話行為と考えられる。この点からも，「か」と待遇性の低さの結びつきが観察できる。

(4)
上記(1)，(3)より，【質問】，【把握】の発話の「な」が，「の」の頻出地域にも現れることから，「な」は，「な／の」の出現頻度の地域差を超えて，「の」よりも広い発話行為を担っていることがわかる。

(5)
発話行為との対応から，「な」，「か」，「かな」，「かいな」，「かいの」は，待遇性の高低で連続していると考えることができる。
親しい相手や目下の者に対する発話では，「な」が「かい」に置き換わることがある。「かい」の方が「か」より，わずかに待遇性が高い。先述の「な」，「か」の待遇性の程度差の中に組み込むと，「な」，「かい」，「か」の順で待遇性の高低があることになる。
【自問】の発話では，「かな」，「かいな」，「かいの」が現れる。先行する語や句に「な」，「の」が単独で続くことはなく，「か」や「かい」に続く形で現れる。先述の「か」，「かい」の関与がうかがえる。また，これら「かな」，「かいな」，「かいの」の出現では，男女差はみられない。聞き手に直接問いかけない発話であるため，ぞんざいさに対する意識が薄いということの現れだと考えられる。

(6)
【質問】の「な」の共起要素としてノダがある。しかし，主に女性の【質問】発話にみられる「な」は，男性の【質問】の「か」と「や」の両方に相当する形式である。そのため，【質問】の「な」の場合は，「か」，「や」の場合と異なり，ノダの出現の規則が明瞭でない。ただし，前述(2)の例外の「か」（例④）のような場面では，【質問】の「な」でもノダが現れない。
また，【問い返し】の「な」で終わる発話には，ノダが現れない。

(7)
イントネーションに関しては，話者の性別，疑問詞の有無を問わず，【質問】で疑問上昇調が必須というわけではない。女性の【質問】の「な」は，会話では現れない（終助詞なしで発話される）ことがあり，この場合，発話末が疑問上昇調のイントネーションになることが多いが，疑問上昇調でない発話も確認された。男性の【質問】の発話に現れる「か」や「や」に伴う音調も，上述の「な」と同様に，必ずしも疑問上昇調というわけではない。疑問上昇調が必須となるのは，【問い返し】の場合である。女性の【問い返し】発話では，「な」が疑問上昇調を伴って現れる。「な」の現れない疑問上昇調だけの場合もある。男性の発話では，疑問上昇調を伴う「か」が現れる。

(8)
「な」と「の」の出現の差が現れるのは【確認】の発話においてである。この【確認】の発話は，いわゆる間投助詞として現れるものも含む。また，他の語や句に続かずに「な」や「の」が単独で現れる相づち的な発話も【確認】に含まれる。高松市三谷町では，「の」の出現が男性の発話，女性の発話ともに多い。綾川町では，男性の発話には「の」がよく現れ，女性の発話には「な」がよく現れる。ただし，女性の発話にも「の」が現れることがあり，「な」よりも「の」を発することが多い女性話者もいる。
【確認】の発話では，「な」や「の」にコピュラや終助詞「わ」，原因・理由を表す接続助詞「けん（きん・けに・きに）」（日本語共通語の「から」に相当）が前接することが多い。そして，終助詞「わ」，もしくは接続助詞「けん（きん・けに・きに）」と「な／の」は，この順で共起する。
間投助詞として現れるものは，「あの（ー）」等のフィラーによる「言いよどみ」，「つっかえ」の後，「もう」や「りきみ声」を発する前後に頻出し，発話全体がリズミカルになることがある。

(9)
「ね」は【確認】の発話として，「な」や「の」よりも待遇性が高いときに現れる。特に，単なる雑談ではなく，テレビ番組を真似て面白い話をビデオカメラの前で友人に披露するようセッティングした中での綾川町の30代男性の発話（雑談では「の」の出現が大半を占める）で，間投助詞の「ね」の出現が目立った。
この面白い話を披露する状況では，まとまった話の切り出し部で「ね」の出現が多い結果となった。また，「あの（ー）」等のフィラーによる「言いよどみ」や「つっかえ」の後で出現することも多かった。

＜引用文献＞
① Austin, John L. (1962) How to do things with words. Oxford: Oxford University Press.

② Givón, Talmy (1990) Syntax: A Functional-typological Introduction, Vol. 2, John Benjamins B. V.

③ 井上優（2002）「方言終助詞の記述研究のために」『日本語学』21(2), pp.48-57.

④ 北野浩章（1993）「日本語の終助詞「ね」の持つ基本的な機能について」『言語学研究』12, 京都大学言語学研究会, pp.72-88.

⑤ 蓮沼昭子（1988）「続・日本語ワンポイントレッスン・第2回」『言語』17(6), pp.94-95.

⑥ 益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』, くろしお出版.

⑦ 渋谷勝己(1999)「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート1』pp.6-15.

⑧ Tsuchihashi, Mika (1983) The Speech Act Continuum: An Investigation of Japanese Sentence Final Particles, Journal of Pragmatics, 7, pp.361-387.

⑨ Wierzbicka, Anna (2003) Cross-Cultural Pragmatics: The Semantics of Human Interaction (Second edition), Mouton de Gruyter.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2 件）

① OTOTAKE Kaori, Distribution of particles *ka*, *ja*, and *zo* in interrogatives in Sanuki dialect, Methods in Dialectology XVI, 国立国語研究所（東京都立川市）, 2017年8月7日～8月11日.

② 乙武 香里,「雑談における讃岐方言ナ行音終助詞の出現の観察」, 日本認知科学会研究分科会「間合い―時空間インタラクション」第4回研究会, 国立情報学研究所(東京都千代田区),2016年3月16日. http://web.sfc.keio.ac.jp/~lui/maai_4th_ototake.pdf

６．研究組織
(1)研究代表者
乙武 香里　(OTOTAKE, Kaori)
国立国語研究所・言語変異研究領域・プロジェクトPDフェロー
研究者番号：60709848

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし